

■知的支援校における実践事例

知的な遅れがある子どもたちにも 文化や情報を保障していきたい

鳥取大学附属特別支援学校

児島陽子 野波雄一 澤田淳太郎



はじめに

鳥取大学附属特別支援学校は、知的な遅れのある子どもたちを教育する知的障害特別支援学校です。小学部、中学部、高等部本科、高等部専攻科があり、児童・生徒数53名のアットホームな雰囲気の学校です。

知的な遅れがあると文字が読めなかったり、本の内容が理解できなかったりすることから、これまで知的障害教育において、「読書は難しい」と思われてきた経過があり、学校図書館活動も全国的に低調です。

しかし、本校では「知的障害児にも文化や情報を保障していきたい」との思いから、その活動の拠点である学校図書館の充実を図っています。その一環として、学校図書館にマルチメディア

DAISY図書を配架し、その活用を通して子どもたちの読書活動の支援をおこなおうと考えました。

研究の目的

マルチメディアDAISY図書は、音声にテキストや絵がシンクロされていて、いまどこを読んでいるのかがわかり、また、文字の大きさや読みの速度も変えることができるため、個のニーズに応じて、さまざまな使い方ができる図書だと思います。

しかし、マルチメディアDAISY図書を学校図書館に揃え、並べただけでは、決して活用されません。個の読書のニーズを把握し、そのニーズに応じて、どのようにマルチメディアDAISY図書を活用すればよいか、その橋渡しをす

る「人」の存在なくしては、有効活用されないと考えています。

そこで、本研究では、どのような実態の子どもたちに、どのような内容のマルチメディアDAISY図書を、どのように使えばよいかということを研究の目的とし、個別の事例を通して実践をおこない、その成果と課題を明らかにすることとしました。

研究準備

まず、2012年（平成24年）7月の職員会で、実際にiPadを操作して、先生方に見てもらいながら、マルチメディアDAISY図書について説明をおこないました。

つぎに、夏休み中に、貸与された2台のiPadの貸し出しをおこない、先生方に操作方法やマルチメディアDAISY図書の内容について知ってもらう機会を設けました。

そして、休み明けに、活用してみたいと思われる子どもたちを募り、実際にiPadを職員室に置き、貸し出し簿を作成して、随時使ってもらうようにしました。

小学部5年男子・A君の事例

①A君について（自閉症）

A君は、絵本が大好きです。ひらがなは全部読めるのですが、拾い読みから少しずつ単語や文節のかたまりを意

識して読むことができるようになってきました。

ですから、絵本は自分でも少しずつ読みますが、まだ読み聞かせをしてもらって楽しんでいるという段階です。聴覚優位（聞いて覚えるのが得意）なので、繰り返し読んでもらった絵本のフレーズなどは、とてもよく覚えています。

好きな絵本は『パオちゃん』シリーズや『ノンタン』シリーズで、休憩時間には、自分が好きな絵本の絵を見ながら自分が覚えているフレーズを言葉にして読書を楽しんでいます。

②取り組みの実際

個別課題の時間の最後にお楽しみとして、教師といっしょに『あいうえおにぎり』を使って読書をおこないました。

音声が出る前に教師が止めて、ハイライトされている文字を一人で読むようにします。その後、音声を流して自分が上手く読めていたかどうか、確かめるようにします。

自分が読んだ通りに音声が出ると、とてもうれしそうな顔をします。教師も「同じだね」とほめるように心がけています。

1ページ読んだ後、もう一度そのページの音声を流し、いっしょに絵を見て、言葉でやりとりしながら楽しむ

ようにします。

iPadの操作は、まだ教師が中心におこなっていますが、少しずつ自分でも画面にタッチして音声を流すようにしており、とても意欲的に取り組んでいます。

休憩時間にも友だちがマルチメディアDAISY図書を見ていると、自ら近くに行って「ぼくもいっしょに見せてください」と伝えて、友だちといっしょに見て楽しむ姿も見られるようになりました。

高等部3年男子・B君の事例

①B君について（自閉症）

B君は、小学校6年生程度の読み書きができます。視覚優位（目で見て理解するほうが情報を受け取りやすい）で、音声だけでは少し長い文になると理解できませんが、文字やコミック会話でその内容を書くなどの支援があると理解できます。

自由時間の過ごし方が課題となっていて、個別の教育支援計画には、「自由時間に一人で過ごす活動を増やす」という目標があり、具体的な支援として、図書館（本やマルチメディアDAISY図書）の活用があがっています。

②取り組みの実際

休憩時間に図書館に行き、パソコンで、マルチメディアDAISY図書を使っ

て読書をしました。担任もいっしょに行き、使い方の手順書を作成して、いっしょに操作しました。5回程度ですぐに覚え、一人で操作できるようになりました。

また、iPadの使い方もすぐに覚え、図書館のパソコンが使えない時には、教室で一人で操作して読書をするようになってきています。たくさんある図書の中から『おおきなかぶ』など、自分でそれなりに理解できそうな図書を選んで読んでいますが、選ぶ時にその内容が少しでもわかるような絵があると選択しやすいと感じています。今後は、保護者とも連携して、家庭でも取り組みたいと考えています。



図書室でパソコンを使って読書



教室でiPadを使って読書

今後の活用方法

簡単に取り組みの実際を紹介しましたが、実践を始めて、まだ4か月程度しか経過しておらず、とくに授業時間の中での活用となると、なかなか定期的に取り組めない状況があります。しかし、実践をしていく中で、A君やB君は、楽しそうにiPadを操作して読

書をする姿が見られるようになってきています。

A君やB君が使っているのを見て、「やってみたい」という子どももいて、今後、より多くの子どもたちに活用してみたいと思っています。そのためには、まず教職員の理解を得ることが大切であると実感しています。また、「文字を大きくすると絵が消えてしまうので、絵がもっとあればいい」とか「もっと多くの絵本がマルチメディアDAISY化されるといい」「絵本を選ぶのが難しいので、本棚の本の表紙に絵があると良い」などの課題も見えてきました。

特別な支援が必要な児童生徒の実態はさまざまであり、読書のニーズも多様です。今後、課題も含めて、今回のような個別の事例がたくさん紹介され、実践が広がっていくことが必要だと感じています。